

令和5年度 仙北市読書感想文コンクール審査結果 (学校名・学年・氏名 ※敬称略)

小中学校の部	
◆仙北市長賞	西明寺小学校2年 西宮志茉
◆角館図書館後援会長賞	角館小学校 6年 布合琉毅
◆仙北市教育長賞	西明寺小学校4年 佐藤好皆
◆新潮文庫賞【特別賞】	角館中学校 2年 若松海那
◆奨励賞も受賞	神代小学校 6年 羽場仁子
◆奨励賞も受賞	神代小学校 2年 小原理子
◆奨励賞も受賞	神代中学校 2年 佐藤綾音
◆入選	角館小学校 2年 藤元永恋
	角館小学校 3年 戸澤杏
	角館小学校 5年 新田淳仁
	神代中学校 2年 小田結子
	神代中学校 3年 進藤綾乃
高校の部	
◆仙北市長賞	角館高校3年 佐藤優美
◆角館図書館後援会長賞	角館高校3年 菊田一葉
◆仙北市教育長賞	角館高校1年 小松心愛
◆新潮文庫賞【特別賞】	角館高校3年 藤原光介
◆奨励賞も受賞	
◆奨励賞も受賞	角館高校3年 藤原光介
◆入選	角館高校1年 加藤瑠夏

令和5年度 仙北市読書感想文コンクール

令和5年度仙北市読書感想文コンクール（仙北市教育委員会主催、角館図書館後援会・(株)新潮社後援）が行われ、仙北市長賞に小中学校の部は西宮志茉さん（西明寺小学校2年）、高校の部は佐藤優美さん（角館高校3年）が選ばれました。仙北市長賞の受賞作品について、それぞれ原文のままご紹介します。

仙北市長賞
小中学校の部



「なかよしだからけんかをする」
西明寺小学校2年 西宮志茉

わたしは、「けんかのきもち」というお話を読みました。なぜ、この本を読んだかというところ、わたしは、なかがよい友だちとけんかしてしまったことがあったので、けんかをした時のきもちをもっと考えてみたいと思ったからです。

この本は、なかよしのたいことだが、けんかをしてなかなかおろすお話をします。

「一番心にくったことは、「めんなー」こうたのでつかい声がした。「なんでだよーなんだあやまるんだよー」という文でした。あやまってくれたのに、なぜおこっているのかよく分かりませんでした。わたしは、あやまってもゆるしてもらえなかったらどうすればいいのだろうと思いました。このときのけんかのきもちがまだおわってない！と書いてあって、けんかをしたときのきもちが、かんとんにおわらないんだなあと思

いました。

二つ目に心にくったところは、「かいだんをのぼりながらどきどきした。」という文です。わたしも、おそくなつてから、「めんね。」と言ったときがあるの、どきどきしたきもちが分かりました。けんかをしてすぐにあやまりたいというきもち、出て来ないけれど、ずっとけんかをしたままだとあいてもいやなきもちなので、時間がたつとあやまろうと思うきもちが出てくるからです。友だちに先にあやまってもううより、自分のほうからあやまるときもちがすつきりします。たいてい、こうたにあやまられてもけんかはおわっていない、と言ったのは、自分が先にあやまりたかったからかなあと思いましたが。

もう一ど、どうして友だちとけんかをするのか考えてみました。すきな友だちとあそびすぎてしまつて、だんだんけんかがおこつてきてしまうのかなあと思ひました。そして、すきな友だちだから、うまくあやまれないのかなあと思ひました。わたしは、これから友だちと何回もけんかをしながら、そうやってすてきな友だちを作つていきたいです。

◆読んだ本／『けんかのきもち』(著者 柴田愛子)

必死になった日々があった。そんな暗闇の中でも、周りをよく見て、耳を傾けると、私を心配してくれる友人、私を支えてくれる家族がいることに気付いた。私は、周りの優しさに気付ける心の余裕が、ほんの少しだけあったからこそ、差し伸べられた手を握ることができた。しかし、余裕がなく一人で、もがき苦しんでいる人は大勢いる。こころたちもその中の一部にすぎない。私は今でも「孤独」「孤城」と戦っている。それは、誰もがそうだと思う。どんなに親しく信頼している人にも、全てを話せるわけではない。友人関係や進路、仕事、家庭など、誰もが、それぞれの「孤独」と必死に戦い、そして生きている。

仙北市長賞
高校の部



「孤独から見える優しさ」
角館高校3年 佐藤優美

人は一人では生きていけない。人は支え合つて生きていくと、よく耳にする。しかし、絶望、恐怖に陥つた時、そういった周りの優しさに気付ける人はいるのだろうか。自分の事で一杯で、むしろ気付かないのではないだろうか。中学校に行かず悩む少女こころはある日、自分の部屋の鏡に吸い込まれてしまふ。そこは異世界で、似たような境遇の中学生七人が集められていた。「何でも願いが叶う鍵」を、仲間と一緒に探しながら過酷な現実と闘う少女たち。優しさの中にも切なく、真剣に考えさせられる物語だ。本の世界に引き込まれ、時間を忘れるくらい夢中になったのは、私自身、共感する部分が多くあったからだ。もしかしたら、私以外でも共感する人が多くかもしれない。なぜなら、生活するうえで、一度は同じような壁にぶつかるからだ。人は誰でも「孤城」

◆読んだ本／『かがみの孤城』(著者 辻村深月)

れる。私は、人思いやる心、人を笑顔に優しくする言葉を大切に、誰か困っている人がいたら、その人の心に寄り添える、そんな人でありたい。そして、今、戦っているあなたへ。自分だけが、暗闇で戦っているなんて思わないでほしい。どんな形であっても、あなたを気にかけている人はいるのだから。その優しさに気付いた時、今までと違った景色が見えるのだから。

がある。「孤独」という名の「孤城」と戦っている。自分が辛い時、苦しんでいる時、差し伸べてくれた手の温もりや優しさを忘れない。それが遠い過去の記憶でも。どんな形であっても繋がっている。そう教えてくれたのが、この「鏡の孤城」だ。こころは、自分と同じ境遇の仲間と出会えたことで救われた。そして、仲間たちも、こころと同じように救われた。出会った当初は、それぞれが当たり障りない表面上だけの付き合いをしていたが、いつしか互いを思いやる強い絆が生まれた。それを最も印象づける場面は、アキがルールを破り、狼に食われてしまう時、こころはアキを、皆を助けるために鍵を探し出し、一つしか叶えられない願いをお願いする。「アキを、みんなを助けて下さい」と。そして、暗闇からアキを助けだそうと、必死に握った手を離さなかった。私の胸も熱くなり、こころたちの絆の深さを知った。オオカミ様のゲームが終わったと同時に、皆の記憶から鏡の中での生活も消えた。しかし、オオカミ様の優しさか、それとも自分たちの心の奥に大切なかけがえのない記憶として何かしらの形で残っていたからか、アキは現世界でカウンセラーの喜多嶋先生とし

て、苦しんでいるこころを救おうとしている。鏡の世界でアキの手を握り救ったのはこころ、現世界でこころを救っているのはアキ。どんなに遠い過去でも、自分が辛い時、優しさに触れたその手の温かさは時が流れても忘れず、心の奥で大切な記憶として残っていると思う。現世界でこころはアキに「闘わなくていい」と言われた。この言葉に、どれだけ救われたのか、その言葉の優しさは計り知れない。鏡の世界で、こころがアキの握った手を離さず、その握られた手の感触、優しさを現世界でもアキは忘れていないように、私も手を握って一緒に駆け出してくられた友人の手の温もりは、今でも昨日のことのように覚えている。

私自身をこころと重ね、様々な思いが頭を駆け巡り、そつと自分の手を見つめ握りしめた。そう、私も以前、友人関係のことで悲しい経験をした。あの頃、私の目に映るもの全て色褪せ、寂しさに包まれていた。私も「孤独」という名の「孤城」と戦った一人だ。絶望、裏切り、悲しみ、人間不信、人と話すのが怖い、どう見られて思われているのか考えるだけで、胸が締め付けられる。胸が痛いのか、それとも私の心が痛いのか。暗闇から這い上がるように、苦しみ、もがき

